

拝啓

すっかり秋の空になりました。早いものでバツカスのご他界から早くも一月半あまり過ぎてしまいました。

あづみ様には一段とお淋しさをつのらせる日々をお過ごしのことと拝察しております。

さてこの度はバツカスのご存命中こよなく愛されたと言う銘酒ご恵送賜りご高配の程ありがたく厚く御礼申し上げます。

拙宅は

御在所岳の真下にあり、二階の窓から藤内壁が見えます。新人の頃はバツカスにマンツーマンで岩場のこなし方をご指導いただいたことを思い出しますが、不思議な事にバツカスに叱られたことは記憶に無く、常に近くに居て頂くだけで安心できる存在でした。

一方酒修行の方は高二の頃からだったと思います。例えばバツカスから夜更けに電話があり「サントリーの角瓶が手に入ったから、みんなを集めてやって来い」と召集がかかり、数人が集まって車座になり、宴が始まりますが一本のウイスキーはあつという間に無くなります。すかさずお母上の敏子様が奥の方から焼酎の一升瓶を持って来て下さるなど、いつもお母上様に甘えながらバツカスと議論をしたり、未だ見たことも無いヒマラヤへの夢を語り合ったものです。

愉快だったのは合宿に入るため、名古屋駅からの夜行列車で松本に行く待ち時間を利用し、駅前のビヤホールへ連れて行って頂いた事です。坊主頭の一目で高校生と解る若者十数名がバツカスを囲んで乾杯したものです。

その付けは翌日早速廻って来ました。松本から島々まで電車で、その後は島々谷をつめて徳本峠を越え、上高地まで一日歩かなければならない。つまり名古屋の駅前でバス代を吞んでしまったのです。

この度拝受しましたボトルを前にしていますと、さまざまなバツカスの想い出が浮かんで来て、あたかもバツカスが私の中に蘇って来られた思いが致します。なろうことなら想い出にふけるだけでなく、再びバツカスと昔のように焼酎を呑んでは、白熱した議論を交わしたいと思う願望ももたげて参ります。

私はバツカスとの議論の中からさまざまな事を学びましたが、その強烈な個性をいつも敬愛していました。そのようなバツカスの個性が何かにつけて話題を呼び、ユニークな存在感をকাশ出しておられたのではないのでしょうか。

梓様、あづみ様のお悲しみもその分強く烈しいものであったと拝察致します。
次第に寒さもつのつて参ります。どうかくれぐれもご自愛の上ご供養下さいま
すよう。

合掌

十月八日

澤田 寿々太郎

石岡 あづみ様